

# 2014年度自己点検・評価報告書(シート)

## 【目標の進捗状況(達成度)評価・報告】(最終年度)

### 《大学》

担当(記述)部局は、 ☆印の箇所を記入してください。

### I. 評価項目・要素と担当部局

本報告書(シート)の自己点検・評価項目・要素と担当部局は次のとおりである。

対象部局	言語コミュニケーション文化研究科
大項目	0 理念・目的 (研究科)
中項目	
小項目	0.0.1 大学・学部・研究科等の理念・目的は、適切に設定されているか。
要素	理念・目的の明確化 実績や資源からみた理念・目的の適切性 個性化への対応
小項目	0.0.2 大学・学部・研究科等の理念・目的が、大学構成員(教職員および学生)に周知され、社会に公表されているか。
要素	構成員に対する周知方法と有効性 社会への公表方法
小項目	0.0.3 大学・学部・研究科等の理念・目的の適切性について定期的に検証を行っているか。
要素	

### II. 目標の進捗状況(達成度)評価と報告【2014.4.30現在】

#### 《進捗状況(達成度)評価》

本項目において、2009年度～2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定し、毎年度進捗状況(達成度)の自己評価を行っている。進捗状況(達成度)評価は、目標の2014年4月30日現在における進捗状況(達成度)の評価(2013年度1年間の活動評価ではなく、2014年4月30日現在で目標がどこまで進んだかの評価)であり、A、B、C、Dの4段階で行ったものである。A、B、C、D評価の基準は目安として次のようなものである。

- A : 目標実現のための計画や方策などを適切に実行し、目標を達成している。もしくはほぼ達成している。
- B : 目標実現のための計画や方策などを概ね適切に実行しているが、まだ目標は達成していない。
- C : 目標実現のための計画や方策などを実行しているが十分ではなく、目標は達成していない。達成にはまだしばらく時間がかかる。
- D : 目標実現のための計画や方策などを実行していない。当然目標は達成していない。

2009年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗状況(達成度)評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
1. 総合的・実践的な学問分野として言語コミュニケーション文化学の確立を目指す。	→教員の研究成果をネット上で公表。	A	A	A	A	A
2. 変化する国際化社会の中にあつて、活躍できる実践力を備えた高度職業人を養成する。	→課程修了者数。進路調査・満足度調査。	A	A	A	A	A
3. 国際的に活躍できる研究者・大学教員を養成する。	→進路調査の実施(研究者数)。国際学会での発表回数。	B	B	B	B	B

☆

2010年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」	2009	2010	2011	2012	2013
	→					
	→					

#### 《進捗状況(達成度)報告》 担当(記述)部局は「指標」に基づいた報告をしてください。

上記で自己評価した目標の進捗状況(達成度)について、次のとおり説明・報告する。

目標1	A	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 言語コミュニケーション文化学の立場から、各教員はそれぞれの研究領域(言語科学、言語文化学、言語教育学、日本語教育学)において活発な研究活動を行い、言語コミュニケーション文化学の確立を図っているが、その成果は研究業績データベースによりネット上で公表されている。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 言語コミュニケーション文化学の確立はある程度達成したが、目標設定時より想定以上に言語コミュニケーション文化学の多様化が進んだため、言語教育学領域や言語文化学領域でカリキュラム改変を実施し、時流の変化に対応することができた。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 2015年度に言語文化学領域に多言語多文化学際プログラムを新設する。さらに、将来構想検討委員会等で今後も言語コミュニケーション文化学の多様化への対応を検討する。	☆
		その他	☆

目標2	A	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 研究科全体として、言語コミュニケーション文化学を背景とする高度職業人の養成を行ってきた。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 2001年度開設以降、修士号は306名、博士号(課程博士)は15名が取得している。これら修了生のうち、135名が高度職業人となった。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 言語コミュニケーション文化学の多様化が進む中、その変化に対応できる高度職業人を養成していきたい。	☆
		その他	
			☆
目標3	B	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 研究科全体として、言語コミュニケーション文化学を専門とする研究者および大学教員の養成を行ってきた。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 2001年度開設以降、修士号は306名、博士号(課程博士)は15名が取得しており、そのうち38名が大学教員として就任・復帰し、活躍している。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 今後も、さらに多くの国際的に活躍できる研究者・大学教員を輩出していく。	☆
		その他	
			☆
備考			☆